女子大國文　第百七十六号　令和七年一月三十一日

篆刻家奥山金剛と女流俳人李郷、下館藩家老奥山小一兵衛

――与謝野門下東京新詩社歌人・田村黄昏の尊属について――

宮本和歌子

はじめに

佐藤春夫や北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、森鴎外らとともに明治末期の『明星』や『スバル』誌上を彩った一人に、東京新詩社の若手歌人田村黄昏、本名田村豊彦（明治十九年〈一八八六〉二月二十日～昭和八年〈一九三三〉十一月九日）がいる。彼の父は農商務省官吏であり大阪高等工業学校で応用化学を教える有能な化学者としても知られた田村典瑞、母は奥山金剛の長女・つ祢である。遺族所蔵の品々から豊彦は父方田村家より母方奥山家の親族と親密な関係であったことが見て取れるが、戸籍謄本を手掛かりに田村典瑞と豊彦の母方叔父・有田兎毛三を調査し、豊彦は家庭内や親族との交流において骨董品や古芸術への関心を培ったらしいことが判明した（写真1）。豊彦は典瑞死去に伴い満二十二歳で家督を継いだが、戸主となってからも叔父の有田兎毛三を頼りにし、晩年まで親しく交流してい

た。

田村典瑞と有田兎毛三の経歴や趣味、豊彦との仲に関しては、令和六年（二〇二四）九月京都女子大学国文学会『女子大国文』第百七十五号三三頁～五八頁掲載の前稿「化学者田村典瑞、医師有田兎毛三　―与謝野門下東京新詩社歌人・田村黄昏の尊属について―」で詳述した。今回は他の奥山家親族、特に豊彦の母方祖父で有田兎毛三の父である奥山金剛と奥山金剛の母とも妻とも伝わる俳人李郷女、金剛の父であり豊彦の母方曾祖父である奥山小一兵衛について調査し、豊彦の親族関係が作歌人生にどのように影響したかを探る。

一　母方祖父・奥山金剛と李郷

前稿で、有田兎毛三を「氏は下館藩家老職の後裔にして、祖先には歴史上有名なる人をも出して居られるが、就中県史上有名なるは奥山金剛氏にして」と紹介する茨城県史研究会編『茨城県史』（昭和五年〈一九三〇〉八月・茨城県史刊行会）六五頁の文を引用した。この箇所は有田兎毛三やつ祢の父であり豊彦の祖父である奥山金剛が、郷土の有名人と認識されていたことを示す。大内地山編『常総古今の学と術と人』（昭和十年〈一九三五〉九月・水戸学塾）七九頁には、「奥山金剛　名を毅といひ金剛は其の号なり真壁郡下館藩主に仕へ書を以って右筆となる又詩文を善くせるを以って明治に至りて四方に周遊せり明治十七年没す」とある。『下館町郷土史』には「実に金剛は河内の国金剛山下に生れ祖先以来、勤王の血を受けた学者であり」[1]という記述があり、金剛という号は下館藩河内領の出生地から望む

写真１（遺族提供。表装された書簡を持つ典瑞。）

金剛山に因んだと推測される。『懐旧集』漢詩之部には「奥山金剛　名毅。字士遠。常陸人。善鉄筆。明治十九年来遊」[2]、『集古会誌』甲寅第四号でも「金剛山人奥山氏名毅字士遠号金剛、昨非居士、竹坨老人常陸下館人」[3]と、士遠という字が記されている。『常総古今の学と術と人』には明治十七年（一八八四）没とあるが、『懐旧集』には「明治十九年来遊」とあり、亀戸天満宮境内の「故芸苑諸名家碑」に明治二十二年（一八八九）物故者として名前があることから明治二十二年（一八八九）までは生きており、晩年は各地を旅していたようである。[4]

飯沼務編『甲信越写真全集』の「隠れたる名篆刻家　泉芝山氏」という中に、「氏は越後新発田の産、十六歳の時瓢然東京に出て成島柳北の友人である奥山金剛と云ふ漢学者について漢学を修め後篆刻に志し」[5]という記述があり、『下館町郷土史』には、天誅組事変に参加し京都西町奉行所で処刑された渋谷伊予作について「十五歳（安政三年）下館藩の学者奥山金剛に就て漢学並に兵学の指導を受けた」と説明がある。[6]『下館市史』上巻では、金剛に師事した渋谷について「このように人格形成にとってもっとも大切な時期に、奥山金剛を師とあおぎ、彼の思想からうけた影響が、結局伊予作の前途を決定したものと思われる」、「奥山金剛は河内国金剛山下（下館藩領、河内分）に生まれた学者で、その地がかつて楠正成とゆかりの土地柄であったので、金剛も祖先以来勤王の精神を強くうけていた人物であった。伊予作はここに感化を受けたものであろう」と分析している。[7]山中啓一著『上毛近世百傑伝』上巻の「木暮喜禄君伝」中には、「同十一年（論者注・明治十一年〈一八七八〉のこと）戸長を辞シ北越人牧野再龍ニ就キ詩文ヲ学ブ傍ラ常陸人奥山金剛ニ鉄筆ヲ学フ」[8]とあり、後に群馬県会議員となる木暮喜禄に金剛が篆刻を教えていたと説明されている。

西村文則『飯村丈三郎伝』に、「明治二年東京に衆議院と云ふものが設けられた。之を公議人と称し、三百諸侯の諸藩から、藩主の選抜した議員が、その衆議院へ召集されし時、下館藩には、一藩を代表するに足るべき人物が二人居た、当時何百人かある下館藩の巨室として仰かれしは牧帰童、上牧正徳二家で、又執政格には、奥山、雨森、福井な

ど錚々たる人物もゐた。就中奥山金剛といふ人物は、容姿堂々として、文才もあり、年齢も五十以上で、世故にも老け、如何にも円熟した人物故、士族も、町人等も、公議人には此人が成るであらうと期待してゐると（下略）」とあり、奥山金剛は風貌、学識、人柄、社交性などあらゆる面において優れ、下館藩の人々から広く尊敬されていた様子であるが、予想に反して「門地、年齢、学識、風采共に上位の奥山まで斥けられ、之に代つて三貧侍で、年齢僅に三十一歳」の鈴木縄という若者が公議人に選ばれ、「下館藩の上下は、此異数の抜擢を見て、或は驚惧し、或は憤慨した」ことも記されている。[9] 奥山金剛は明治初期の下館藩が誇る傑物の一人と認識されていたことが見て取れる逸話であるが、明治二年（一八六九）に年齢が五十以上であったという箇所から、奥山金剛の生年は文化（一八〇四～一八一八）後期から文政（一八一八～一八三〇）初期の生まれと推定できる。

他方、日本互尊社編『互尊翁』によると、印影を押した紙に、「東京芝佐久間町二丁目十八番地／篆刻師　金剛山人毅　奥山金剛／乙酉五十八歳／明治十八年乙酉年十二月十七日長岡渡リ町旅店品田友七宅ニ於テス」と、明治十八年（一八八五）から同十九年（一八八六）頃に新潟の長岡を訪れて印を彫った際に書かれたものがあるという。[10]『飯村丈三郎伝』と『互尊翁』から推定される奥山金剛の生年には約十年の開きがあるが、金剛から直接伝えられたであろう『互尊翁』記載の明治十八年（一八八五）に五十八歳という年齢を信じれば、金剛は文政十一年（一八二八）の生まれで明治二年（一八六九）には四十歳過ぎであったことになる。戸籍謄本のつ祢の欄に「茨木（ママ）県真壁郡下館奥山麓妹明治十四年六月十七日田村典瑞ト婚姻届出同日入籍」とあることから、つ祢が結婚した明治十四年（一八八一）六月、金剛が満五十二、三歳の時点で嫡子の麓に家督を譲っていたのであり、豊彦誕生後の明治二十二年（一八八九）まで存命し各地を回り印を彫っていたのである。江戸から明治へと世が移り、下館藩家臣としての職を失い自身も不惑を迎えてからの金剛は旧幕時代のように漢学や兵学を教えるのではなく篆刻家として活動したが、篆刻家としての各地

周遊は隠居後の趣味のようなものであったと推測される。

田島定邦編・蔵版『蚕桑余事』（明治八年〈一八七五〉十二月・出雲寺万次郎刊）十丁裏には「抵桐生途中」と題した金剛奥山毅作の七言絶句が、岩垂憲徳『漢詩綱要』（昭和十七年〈一九四二〉四月・清水書店）八八～八九頁には「荒木村重」と題した金剛の七言絶句が収められている。岡村清吉編『東京名家独案内』の「書画家及諸文人一覧」では、「奥山金剛　篆刻。芝愛宕下三丁目」[11]と篆刻家として紹介され、明治二十二年（一八八九）一月・竹村貞次郎印刷発行『東京八大家一覧』では、篆刻八大家の一人に「芝南佐久間町二丁目十八番地　奥山金剛」が挙がっている。[12]有栖川宮熾仁の日記には、明治十一年（一八七八）七月二十八日日曜日「東伏見嘉彰・柳原幹事・羽倉可亭・奥山毅来入之事」、同年八月二十五日「判事北畠治房・篆刻工奥山毅来之事」、明治十二年（一八七九）七月八日火曜日「香港知事ヘンネツシー氏夫妻・奥山毅入来之事」と奥山金剛の名が複数回登場し、[13]高松宮家編『熾仁親王印譜』（昭和四年〈一九二九〉八月・高松宮家）二六頁から三二頁には明治十一年（一八七八）七月に金剛が刻んだ二十二個の印影が収められている。『熾仁親王行実』巻下にも「御愛用の印は、百数十顆の多きに上り、現存するもの、大小合せて九十余、概ね源元祥、細川林斎、羽倉可亭、中井敬所、豊田長江、奥山金剛等の刻に係る」[14]とあり、金剛の篆刻は有栖川宮熾仁のお気に入りであったという。

「奥山麓。茨葉と号す、金剛翁の嫡子なり、詩書を善くし又大塊翁に就き南画を学ぶ」[15]と『下館町郷土史』にある金剛の嫡子・麓であるが、南画だけでなく歌も嗜んだらしく、流麗な文字で「鳴せみの日もくれ井どの細竿にいと願はしき魚のかたれる」「夏木立あつさをしのぎたちよればまた袖ぬらす杜のしら露」という詠歌が記された麓の短冊二枚（写真2）の他、「月に就て鞦韆移す樹の間哉」「蓬莱によき顔合や二日月」と書かれた李郷女名義の短冊二枚（写真3）も豊彦遺族宅に保管されている。李郷女については、『下館市史』に「奥山金剛の母は五代下館藩主石川総般の娘

で、名を勇（ゆう）といい、女流俳人として名があり李郷と号した。金剛もその血をうけ、風采堂々として文筆にすぐれた学者で人望があったといわれる」、「家老奥山小一兵衛に嫁いで奥山金剛を生み、女流俳人として名のあった人である」とある。[16]『下館町郷土史』では、浄土宗専称寺の項に「奥山李郷の墓あり、李郷院檀誉貞香芳弥禅定尼文久二年正月五日没俗名勇六十二才、李郷院は城主石川総般の御息女、後家老職奥山小一兵衛政懿に嫁す。政懿は楽斎と号し嘉永七年没、李郷院は俳句を能くし、女流俳人として声名があった」[17]と説明されている。一方、『女流著作解題』には「李卿女」の説明があり、「常州下館石川候の次席家老たる奥山金剛（勧解由）の妻である。金剛は藩の軍監をも勤め、又博学能書を以て聞えた人。妻の李卿は才色共に秀で、且高雅な婦人であった。俳諧は逸淵に学んだが、文久二年正月五日、行年六十二で没した。男弘毅の建てた其の墓は、下館町専称寺にある」[18]と、奥山金剛の妻とされている。

俳諧を嗜み、文久二年正月五日（一八六二年二月三日）六十二歳で亡くなり、下館の専称寺に墓があるという点から李卿女というのは『下館町郷土史』の李郷と同一人物とみられるが、『下館町郷土史』では彼女を奥山金剛の母とし

写真 2（遺族提供）　　写真 3（遺族提供）

ているのに対し、『女流著作解題』では金剛の妻としている。『飯村丈三郎伝』の記述を採れば奥山金剛の生年は文化（一八〇四～一八一八）後期から文政（一八一八～一八三〇）初期と推定されるが、明治十八年（一八八五）に五十八歳であったとする『互尊翁』の記述を採れば文政十一年（一八二八）と推定されることは前述のとおりである。一方、李郷は文久二年（一八六二）に六十二で亡くなっているとあることから寛政十三・享和元年（一八〇一）生まれと考えられ、金剛より約十五年または二十七年早く生まれていたことになる。

李郷が金剛の妻であったとすれば、文久元年五月六日（一八六一年六月十三日）につ祢を産んだ三保は後妻であったことになるが、第五代下館藩主石川総般の娘であり第七代下館藩主石川総承の妹という立場であった李郷[19]が、母子ほど年齢の離れた家臣奥山家の金剛に嫁した後離別、金剛は新たに若い三保と再婚したとは考え難い。それだけでなく、金剛と離別した先妻の短冊が後妻から生まれた豊彦の母・つ祢に伝えられたとも考え難い。「男弘毅の建てた其の墓」という前掲『女流著作解題』の記述であるが、安政四年十二月十六日（一八五八年一月三十日）二宮弥太郎宛書簡に「奥山勘解由／弘毅[20]」と署名している。旧幕時代の金剛は勘解由[21]と名乗り弘毅という名も有していたことを二宮弥太郎筆書簡や衣笠兵太夫筆書簡で確認できることから、つ祢誕生の翌年に死去した李郷の墓を建てたのは奥山金剛で間違いないだろう。後妻との間に子供まで誕生していながら離別した前妻の墓を建てたとも思えず、金剛と李郷の生年と墓建立の件を鑑みて、『下館町郷土史』の記述通り李郷は金剛の母と考えるのが妥当である。李郷という号で俳諧を嗜んだ石川勇は二十代で奥山小一兵衛[22]に嫁ぎ、文政十一年（一八二八）に数え年二十八歳で嫡子の毅または弘毅、後の金剛を生んだと推定される。すなわち、豊彦の母方曽祖母が第五代下館藩主石川総般の娘・勇である。

前稿で金剛の息子、豊彦の叔父である有田兎毛三の集古会参加に言及したが、『集古』癸亥第二号（大正十二年〈一九二三〉二月・集古会）十丁裏掲載の「第百四十回集古会記事」によると、同年一月十三日開催の同会において古人

和歌短冊という課題に対し、兎毛三は北村湖南や香川景樹、烏丸光賢、佐々木弘綱や税所敦子らの短冊百枚を出品している。山岡鉄舟[23]、成島司直や有栖川宮妃といった奥山金剛と親交があった人物やその血縁者の短冊が複数あること、兎毛三は祖父伝来の品を集古会に出品していたという記述も見られること[24]、兎毛三の曾祖父である石川総般ゆかりの品を集古会に出品していること[25]、前述のように金剛の作品を出品することもあったことから、兎毛三の集古会出品物には奥山家ゆかりの品が多数含まれていたと判断できる。兎毛三の出生地である下館町から見える筑波山に因んだ紫峰という号は、出生地から近い金剛山に因んだ金剛という号を用いた生家の父への敬意を窺わせる。兎毛三が可愛がっていた豊彦も母方祖父を敬愛していたとみえ、金剛宛の古い書簡に手製の包み紙を施している他、翻字を試みた豊彦の便箋も発見されている。

大正十四年（一九二五）十二月『集古』丙寅第一号・九丁表掲載の集古会出品目録には、親子という課題への有田兎毛三出品物の一つに奥山金剛父子師弟合作幅がある。奥山金剛父子の子とは茨葉という号で詩書を得意とした長男の麓でなければ二男の正路か兎毛三、あるいは存在の判明していない他の息子の可能性もあるが、「父子師弟合作」という表現は金剛自ら息子に書や詩を教えていたことを示す。「わらの香のはつ日にほめく戸口かな[26]」という句が『おらが春』の「脇起誹諧連歌」五十八句目に収められている李郷、『懐旧集』漢詩之部で漢詩が三首紹介されている金剛、魚が口を開閉する様を独自の表現で詠んだ歌を残している麓など奥山家には韻文を得意とする者が多い。金剛自ら息子たちに漢詩や篆刻の手ほどきをし文芸創作が身近な環境であったことは想像に難くないが、奥山金剛の外孫である豊彦も、漢詩文調の表現を多用した合計八千字近い『四国／中国紀行日誌』を満十三歳で、西行の歌や不識庵上杉謙信による「霜満軍営秋気清」で始まる七言絶句を引用した漢文調の作文を満十五歳で書くなど早くから文芸への関心と知識を有していた[27]。

明治三十五年（一九〇二）四月、中学校五年生に進級直後の豊彦が田村鈍太郎名義で記した奈良月ヶ瀬への探梅旅行記『春雨日記』には梅や鶯、月など主に自然の風物の美しさを詠った十首以上の歌が含まれ、中学生時代の豊彦が既に作歌を行っていたことがわかる。豊彦の十歳下の弟・徹も十折という号で俳句を作り和歌・俳句の会に所属していたように[28]文芸、特に韻文は奥山家のお家芸といってもよく、つ祢の息子たちも奥山家の影響を存分に受けていた様子である。なお、自然の情景を詠んだ中学校時代の歌風は先に紹介した奥山麓の歌と似ていることから奥山家の誰かに歌の手ほどきを受けたと推測されるが、豊彦の歌風に関する検証は別の機会に譲ることとする。

二　母方曾祖父・奥山小一兵衛

『二宮尊徳全集』第九巻所収の衣笠兵太夫による嘉永五年十二月八日（一八五三年一月十七日）付書簡に「小一兵衛儀、去ル戌年出坂ノ節、役柄に不応儀有之に付、年寄役取上ケ、隠居被申付、家督之儀は忰勘解由へ無相違[29]」とあり、奥山勘解由、後の金剛は満二十四、五歳で父・奥山小一兵衛から家督を継いだことがわかる。

第三章掲『下館町郷土史』によると、第七代下館藩主石川総承の実子であり、隠居した総承の家督を継ぎ、天保七年十二月（一八三七年一月）に第八代下館藩主となった石川総貨[30]の治世に下館藩は危機に直面したという。その理由は、同書で次のように説明されている。

第一に封建的制度の基礎漸く崩れ、経済的破綻は各方面に顕はれ、総ての階級に普つて経済生活の動揺に悩まされた社会的過渡期であつた。

第二に天明の凶作に続いて天保年間の惨禍に見舞はれ、農民窮乏の極に達し全く農民大衆をして餓死線上に彷徨はしめた。道路に横はる餓死の姿、草の葉、木の根を食ひ尽し、盗賊いたる処にはびこり、困苦の様は筆舌に

尽されぬ程であつた。

第三には藩主の莫大な借財のため藩経済は不如意となり、藩士も、町人も、農民もこれがため経済難と負担のために領内皆貧の状態にまでなつてしまつた。

下館藩領内皆貧の更生対策として二宮尊徳翁を招聘して藩、村の経済的立直を行つたのはこの時であつた。[31]

前掲『下館町郷土史』七三頁によれば、天明六年七月十五日（一七八六年八月八日）から十七日に大洪水に見舞われ、天明七年（一七八七）には全国的な凶作で米価が高騰していたところ大火が発生、安政三年八月二十五日（一八五六年九月二十三日）には大風雨で城下の四分の一近い住居や寺院が倒壊したという。天保七年（一八三六）の飢饉の際には、「下館藩は享保の頃領内の人口は一万余人であつたが、領内衰微の文政、天保の頃は六千人内外となつた。藩主の負債も新古合せて三万九千余両その利息金千五百九十余両」[32]と下館藩主も領民も困窮したという。二宮尊徳による財政再建策は仕法と呼ばれているが、同書では尊徳が下館藩の仕法に携わるまでの経緯を次のように記している。

下館藩の仕法の発端は天保八年に翁のもとへ仕法開業を懇願したときから始まる。（中略）天保八年八月高田尉右衛門は桜町に赴いて藩の窮迫の事情を訴へ仕法を願つた。一家の財政を救ふ事さへ容易でないのに、まして領内の仕法開発はなか〳〵の大難事である。尊徳先生は当時小田原の救済を命ぜられたり、既に青木、谷田部等関係は漸く広く、また桜町仕法の年限も終つて小田原に帰国の時期も迫つて来るし、事務も煩雑となつて到底引受ける暇もないので謝絶された。下館藩は一、二回の謝絶で退く程の弱腰なものでもなく、謝絶で退く程の軽い窮迫でもなかつた。尊徳先生は之の押問答の中に小田原の救済に十二月より赴いた。下館藩からは高田、衣笠両氏等が翁を訪問し、その度毎に対話中授けられた教訓は益々下館藩をして報徳仕法を要求するやうに熱心にさせてしまつた。（中略）天保九年九月に翁が桜町に帰へるを待ち受けて衣笠兵太夫以下詰切り懇談したので翁も謝絶す

ることも出来ないで遂に仕法を引受けることになった。[33]

下館藩は天保八年（一八三七）八月から尊徳に度々仕法を依頼し断られていたが、天保九年（一八三八）九月に遂に根負けした尊徳が仕法を引き受け、下館藩再建に向けた取り組みが始まった。この際、尊徳に何度も仕法を依頼していたのが冒頭に掲げた奥山金剛の家督継承を伝える書簡の筆者、衣笠兵太夫であり、尊徳と盛んに往来をして仕法を伝授された一人が豊彦の母方曾祖父で李郷の夫、奥山小一兵衛である。

小一兵衛は『大武鑑』天保十四年（一八四三）版、『大武鑑』天保十五年（一八四四）版に、二万石常州下館の石川近江守総貨を主君とする家老牧志摩以下、定府年寄上牧甚五太夫に次ぐ年寄二人目として記載されている。[34] 嘉永三年十二月朔日（一八五一年一月二日）二宮尊徳日記には、「重役奥山小一兵衛御宅へ、夕七ツ時半、忰並、八郎、渋谷氏案内頼、則罷出、御役々銘々出席左之通り／家老　牧志摩　同　柴田利兵衛　同　奥山小一兵衛（下略）[35]」のように、尊徳らが小一兵衛宅を訪れたという記録において彼は牧志摩、柴田利兵衛とならび「家老」と表記されており、下館藩家臣団の中でも二、三番目の高位にいたことを確認できる。

奥山小一兵衛は、天保九戊戌年十月二十九日（一八三八年十二月十五日）の二宮尊徳日記に「下館奥山小兵衛殿衣笠兵太夫殿町年寄中村兵左衛門罷越候事[36]」と初登場して以降、天保九年十二月二十二日（一八三九年二月五日）二宮尊徳日記「下館奥山小一兵衛殿渋谷利左衛門殿被罷帰候事[37]」、天保十己亥年正月十八日（一八三九年三月三日）二宮尊徳日記「下館奥山小市兵衛殿被罷越候事[38]」など、小市兵衛、小兵衛表記でも度々登場している。[39]『二宮尊徳全集』第六巻には、下館藩の仕法開始が決定した直後である天保九年十一月八日（一八三八年十二月二十四日）付奥山小一兵衛筆書簡[40]も収録されている。豊彦の母方曾祖父である奥山小一兵衛は下館藩の重臣として初期から仕法に関与していたのであるが、『二宮尊徳言行録』は、下館藩の仕法の様子を次のように説明している。

常州下館候は禄二万石、負債三万余両に及び、天保九年に至りては、一藩領民皆困窮の極に達す。是に於て郡奉行衣笠某なるもの桜町に来り、辛うじて二宮翁に面会を得て、仕法を懇願す。翁例によつて之を固辞し、先づ小田原候の許を受けしめて、後之に応じ、豊凶十年を平均したる分度を定め、之に先ちて米粟を贈りて、一藩の急を救ひ、而して後数十人の筆算の士を雇ひて、数ヶ月間の丹誠により、美事両条の調査を成就したり。

次に翁は家老上牧某に理を説き、義を諭して主君の恩禄を辞せしむ。家老翁が言に感激して、速かに禄三百石を辞す。之を聞きて其の下役なる大島某、小島某も進んでその禄を辞せり。是に於て翁は此の三人の行動を大に嘉し、桜町より米粟を贈りて其難苦を補ひたり。

斯くて翁は亡国に瀕せる下館の為に法を立て、先づ一ヶ年、一月二月の両月は、国用米財を翁が方より贈り、七月八月は下館町の富商八人にて之を補はしめ、三四五六の四ヶ月は宗家石川候の慈仁に訴へて補給を仰がしむることゝし、その償却は興復の後を待つも易し。而して定規の租税は毎年以て旧来の借財を償却するに供さば、三万の借財を償却するに庶幾からむと。

本家も商人も皆二宮が誠意に感じ、其用財を惜まず。是に於て一年の貢税を以て焦眉に迫る負債を償却し、以て多額の元金を減金を為すを得たり。之を三万両償却の手初めとし、それより翁は下館候の為に領内灰崎、下岡崎、蕨の三邑に安民の法を講じ、邑民を悦服せしめ、風俗を淳厚ならしめたり。[41]

莫大な負債を抱え返済の目途が立たず困窮していた下館藩では、仕法の実施に伴い当初から尊徳や裕福な商人の協力だけでなく、家臣の俸禄返上や減俸が行われたというのである。『二宮尊徳全集』第二十五巻「解題」に、「藩士の減俸と、天保十年の立替金の無利息据置とによつて、相当に返金の順序は立てられた」、「仕法の進行は一時頓挫した。爾後幾多の接衝を重ねて、嘉永三年に至つて、藩士は一ヶ年の給与を辞して、厚き決意を示し」、「藩士の俸禄二割八

分減の還元によって、年々の利払償還高僅に七八百両に減額した」とあるように、[42]家臣の減俸や給与返上は仕法開始から十年以上経過しても行われていた。

天保十四年（一八四三）には、四文ずつ資金を積み立て、記名投票によってメンバー内から選出した困窮者に無利子で金を貸す報徳信友講という結社が藩士によって結成されている。奥山小一兵衛と幼名斧太郎を名乗っていた若き日の金剛もメンバーに名を連ねて初回から積立金を出資していたが、[43]下館藩家臣最高位にいた家老の牧志摩でさえも貸附人に選ばれることがあり、[44]小一兵衛も弘化二年（一八四五）に七両七ヶ年の無利息金貸附人に選ばれ、[45]金剛も奥山勘解由として嘉永三年（一九五〇）に七両七ヶ年、安政元年（一九五四）に五両五ヶ年の無利息金貸附人に選ばれている。[46]他の下館藩家臣同様に奥山家も決して生活に余裕はなく、文政十一年（一八二八）生まれと推定される金剛に至っては満十四、五歳から積立に参加し、二十代で複数回無利子の借金をし返済に追われる状態であった。

尊徳の仕法により下館藩の財政は改善していったが、本章冒頭で掲出した衣笠兵太夫筆二宮尊徳宛書簡の通り、嘉永五年（一八五二）に小一兵衛は何らかの不行跡により年寄役を解かれて隠居処分を受け、家督を息子の奥山勘解由に譲っている。衣笠兵太夫は嘉永五年十二月二十日（一八五三年一月二十九日）付二宮尊徳宛書簡でも、「扨又先月二十九日、奥山小一兵衛儀取上、隠居被申付、家督之儀は忰勘解由へ無相違被申付候、（中略）右は去る戌年出坂之節、役柄に不応儀有之趣に御座候」[47]と、小一兵衛の隠居に触れている。前章での『下館町郷土史』掲出箇所に小一兵衛は嘉永七年（一八五四）没とあったが、『大武鑑』嘉永七年（一八五四）版では家老牧志摩に次いで年寄の一人目に奥山小一兵衛の名があり、[48]一度解かれた年寄職に死の直前に復帰していたようである。だが、以降の『大武鑑』には小一兵衛は登場せず、勘解由は安政六年（一八五九）版『大武鑑』や慶応三年（一八六七）版でも定府家老として掲載されているが、[49]明治元年（一八六八）版では役職は用人である。[50]

文政十一年（一八二八）生まれと推定される奥山金剛は尊徳が下館藩の仕法を承諾した天保九年（一八三八）には満十歳ほどの子供であったばかりか、成長期に天保七年（一八三六）の飢饉も経験していたことになり、贅沢な子供時代ではなかったであろう。また、小一兵衛、金剛とも報徳信友講で借金をしていたことは前述のとおりである。旧幕時代の奥山金剛は父・小一兵衛の跡を承け、下館藩家臣として二宮尊徳の指導下で藩政再建と藩士の互助に協力していた。女流俳人を母に持ち漢学や書、詩などに才能を発揮した金剛は時代が変わってから篆刻家として名を上げ、有栖川宮邸に出入りしたり各地を旅したりしながら印を彫り、のんびりした余生を送ったようである。

麓や有田兎毛三ら金剛の息子は号を有し篆刻や書、画などを得意としてはいたが、麓は真壁郡役所勤務、兎毛三は医師とそれぞれ真面目な職に就いていた。金剛の内孫で豊彦の従兄である奥山保にしても著名な日本画家に画を習い号を持っていたが職業画家にはならず、図案を教える教員として大阪高等工業学校勤務をした後に三越呉服店図案部に勤務している。若い頃の金剛も金剛の息子たちも孫の保も得意とする趣味とは別に生計を立てる手段としての職を持っていたが、仕事と趣味を区別し堅実な生活を選ぶ彼等の姿勢は、下館藩の財政難に直面し倹約を余儀なくされた奥山小一兵衛や奥山金剛の経験に基づいた奥山家の方針だったのではないか。金剛ら奥山家の人々の仕事と趣味の区別と両立に見られる堅実性を考えると、東京帝国大学在学中、特に明治四十三年（一九一〇）には非常に多くの歌を『スバル』と『明星』に発表した豊彦が、大正元年（一九一二）十月の東京帝国大学卒業年以降はほとんど歌を発表しなかったこと、その一方で作歌を止めず生涯歌を作り続けいつかは歌集刊行を望んでいたらしいことも納得がいく。漢詩や篆刻を得意としていた奥山金剛は時代が変わって新しい世になるまでそれらを仕事とせず、有田兎毛三が骨董蒐集や俳句に熱中するもそれらを本職としなかったのと同様、豊彦にとっての歌も一生情熱を傾ける対象ではあったが家計を支えるための仕事を擲ってまで熱中するものではなく、生計を立てる手段を別途確保した上での余技として

認識していたのだろう。

豊彦遺族は『灯』と題された明治四十四年（一九一一）一月に始まる豊彦の日記を保管しているというが、満二十五歳の誕生日である同年二月二十日には、明治四十一年（一九〇八）の父の死から数年経ち、怠惰に暮らす己を省み戸主として家を支えていくことへの決意が記されているという。[51] 豊彦は明治三十六年（一九〇三）九月第三高等学校に入学して寮の仲間と雅星会という作歌会を結成して歌に励み（写真4）、同校卒業を数ヶ月後に控えた明治三十九年（一九〇六）春に東京新詩社に加入している。以降、東京帝国大学在学中には藤岡長和らと足繁く与謝野夫妻の下へ通い、明治四十三年（一九一〇）には与謝野夫妻ら東京新詩社の仲間とともに塩原への一泊旅行に行くなど、学業よりも東京新詩社での交流や活動に熱中していた。[52] 戸主であった典瑞の死に伴い明治四十一年（一九〇八）に家督を相続し、東京帝国大学最終学年を迎えるに際して一時的な享楽を求め己の愉悦を第一とする生活を自省し、戸主として田村家の生活を支えていくべき己の立場を熟慮した結果が、東京帝国大学卒業以降の歌の発表の急減であったと結論付けたい。

冒頭で豊彦と同時期に東京新詩社に出入りしていた豊彦と同一生年月日の石川啄木の名を挙げたが、富裕な名家に生まれ実の両親と良好な関係で育ち、金銭的に余裕があり与謝野晶子による金策目的の来訪をしばしば受けたと遺族に伝わる田村黄昏、私生児として生まれ他人に金品を融通してもらうことが当然の家庭で育ち本人も無計画な借金を繰り返しルーズな金銭感覚で周囲を困らせた石川啄木、生年月日を同じくする二者の対照性が

写真4（遺族提供。雅星会結成から約半年後、明治37・1904年3月6日撮影。後列左から二番目が豊彦。）

彼等の歌や東京新詩社での活動でいかに反映されているかについては、遺族宅に残る豊彦宛与謝野夫妻の書簡の検証、豊彦の歌風変遷の検証と併せて今後の研究課題の一つである。

おわりに

明治末期、与謝野寛率いる東京新詩社の若手歌人として『明星』、『スバル』に多くの歌を発表した田村黄昏、本名豊彦の父親である田村典瑞、母方従兄の奥山保、母方叔父の有田兎毛三、母方祖父の奥山金剛と金剛の母で豊彦の母方曽祖母である女流俳人の李郷、さらには母方曾祖父の奥山小一兵衛について、前稿と本稿で豊彦との血縁関係を明らかにしつつ説明してきた。豊彦の父・典瑞は農商務省官吏として、化学者として、教育者として活動する一方で骨董品に関心を抱いていたが、豊彦の母・つ祢の実家である奥山家の親族にも骨董に関心を持つ者や篆刻や詩歌、絵画、書に秀でた者が複数いた。

豊彦の母方親族のうち、本業を医師とした豊彦の叔父・有田兎毛三は豊彦誕生の明治十九年（一八八六）を挟む明治十七年（一八八四）から明治二十年（一八八七）まで鹿児島医学校で学んでおり、出生直後の豊彦の最も身近にいた親族であった。義兄である典瑞が鹿児島医学校の教員を務めていたことから同校へ進学したと思しき兎毛三であるが、骨董品を持ち寄り鑑賞して造詣を深める集古会の会員として活動し、紫峰という号で篆刻や俳句を嗜んでもいた。典瑞方に寄宿していたことのある豊彦の従兄・奥山保は東京美術学校出身、複数の画家に師事し古研という号も持ちながら本業は図案家であったし、保の父、豊彦の伯父で真壁郡役所に勤務した麓は画や詩書の心得があっただけでなく美麗な文字で歌を残している。豊彦の母方祖父である奥山金剛の金剛は号として名乗っていたもので、多才な金剛は下館藩で家老を務める傍ら幕末期から多くの人々に漢学や篆刻を教え、明治期に入ってからは有栖川宮熾仁愛用の

印を彫るなどし東京市の篆刻名人に数えられていた。金剛の母で下館藩五代目藩主石川総般の娘・勇は李郷という号で俳句を詠み、『おらが春』にも一句収められている。

藩主の娘を母方曽祖母とし家老を母方曽祖父、祖父とする豊彦の血統は家格自体もさることながら文人の家系としても名家というに値し、篆刻や詩歌を得意とする者の多い奥山家親族との交流を通してごく自然に文芸や芸術に親しむことができるという点において豊彦は大変優れた環境で育っていた。文芸や伝統芸術に対する豊彦の関心は奥山家の人々との交流の中で高まっていき、中学校時代には古典的知識を踏まえた歌を詠むようになり、第三高等学校時代には浪漫主義を掲げる東京新詩社へ加入するほどに歌への情熱が強まったのだろう。

奥山金剛の父である奥山小一兵衛は下館藩年寄または家老として、危機に瀕した下館藩の財政難から脱却すべく他の家臣らとともに二宮尊徳の指導による仕法を実践していた。藩全体が貧困に喘ぎ、下館藩家臣団の中でも高位の家老であった小一兵衛も勘解由と呼ばれていた若き日の金剛も、旧幕時代は藩のために俸禄返上をしたり無利子とはいえ借金をしたりと決して楽な暮らしではなかった。金剛の息子である麓や有田兎毛三は趣味にかまけて本業を疎かにすることなくきちんと仕事を続けていたようであるが、生計を立てる手段と趣味や特技を区別し仕事と両立する堅実な姿勢は、貧苦を経験した小一兵衛や金剛の教訓によるものだったのではないか。

典瑞亡き後の豊彦は、戸主として一家を支えるべき立場であることを自覚する一方で、学業を疎かにし怠惰な暮らしを送っていることに苦悩していた形跡がある。東京帝国大学卒業の明治四十五・大正元年（一九一二）を境に東京新詩社での派手な遊興を伴う生活からは徐々に遠ざかり歌の発表も激減したのは、いつまでも趣味にばかり熱中していられない境遇を弁えてのことであったと考えられる。しかし、父・典瑞だけでなく麓、兎毛三ら奥山家親族が仕事の忙しさを理由に骨董や文芸を止めなかったように豊彦も仕事を理由に作歌を止めることはなく、生涯詠み続けた多

数の歌が現在も遺族宅に眠っている。

なお、本稿の最後に前稿と本稿で説明してきた田村黄昏の家族と母方奥山家の関係を示した家系図（図1）を添付しているので、参考にされたい。

注

（1）下館町郷土史調査会編『下館町郷土史』（昭和十五年〈一九四〇〉二月・下館町役場）七八頁より引用。

（2）山本静古編『懐旧集』（大正十三年〈一九二四〉六月・真野村教育会）五頁より引用。同書四六頁では、奥山金剛による七言絶句「拝真野山陵」、五言絶句「抱石梅」、七言絶句「恋浦口上」の計三首が紹介されている。

（3）『集古会誌』甲寅第四号（大正五年〈一九一六〉七月・集古会）六丁裏、七丁表より引用。

（4）奥山金剛の没年は、本文掲『常総古今の学と術と人』七九頁には「明治に至りて四方に周遊せり明治十七年没す」とあるが、本文掲『互尊翁』四二〇頁では明治十八年（一八八五）から同十九年（一八八六）長岡に滞在して印を彫ったとあり、磯ケ谷紫江『墓碑史蹟研究』第七巻（昭和五年〈一九三〇〉三月・後苑荘）所収「故芸苑諸名家碑　―亀戸天満宮境内―」八八八頁の明治二十二年（一八八九）物故者の中に、奥山金剛の名がある。

（5）飯沼務編『甲信越写真全集』（昭和六年〈一九三一〉三月・文龍館、甲信越写真全集刊行会）二二七頁より引用。本文掲出箇所に「成島柳北の友人である奥山金剛」とあるが、雑司ヶ谷霊園にある豊彦の墓は成島柳北の墓のすぐ近くである。

（6）注（1）に同じ。

（7）下館市史編纂委員会編『下館市史』上巻（昭和四十三年〈一八九八〉九月・大和学芸図書）五一一頁より引用。

（8）山中啓一『上毛近世百傑伝』上（明治二十四年〈一八九一〉十二月・山中啓一刊）二六一頁より引用。

（9）西村文則『飯村丈三郎伝』（昭和八年〈一九三三〉十月・昭文堂）一五七頁参照、引用。

(10) 日本互尊社編『互尊翁』（昭和十二年〈一九三七〉十二月・日本互尊社）四二〇頁参照、引用。
(11) 岡村清吉編『東京名家独案内』（明治二十三年〈一九八〇〉四月・上田屋、中外堂、明善閣）十二頁より引用。
(12) 関義城『江戸明治　紙屋とその広告図集』続編（昭和四十四年〈一九六九〉十月・関義城著、刊）一四四頁参照、引用。
(13) 『熾仁親王日記』巻三（昭和十年〈一九三五〉七月・高松宮蔵版）六九頁、八〇頁、二一二頁より引用。
(14) 高松宮家編『熾仁親王行実』巻下（昭和四年〈一九二九〉八月・高松宮蔵版）四四九頁より引用。
(15) 前掲注（1）同書九八頁より引用。
(16) 前掲注（7）同書五八六頁、五九七頁より引用。
(17) 前掲注（1）同書一四七頁より引用。
(18) 女子学習院編『女流著作解題』（昭和十四年〈一九三九〉十一月・女子学習院）四四六頁より引用。
(19) 北川舜治編『日本藩史』巻之八（明治十七年〈一八八四〉四月・沢宗治郎、田中治兵衛、岡島真七他刊）一八七～一八八頁に「養牧野忠精次子忠朝為嗣、改名総親、享和二年十月、総般卒、十二月総親襲封、（中略）文化五年十月卒、無子以義父総般子総承為嗣、十二月襲封、（中略）天保七年十二月、致仕、長子総珍襲封（中略）改名総貨」とあるように李郷の父・総般は享和二年（一八〇二）に亡くなり養子の総親が家督を継ぎ、文化五年（一八〇八）には総親が死去して寛政八年（一八九七）十二月生まれの養子の総承が家督を継ぎ、天保七年（一八三七）十二月に隠居するまで第七代下館藩主を務めていた。つまり、金剛が生まれた時点での李郷の立場は先々代である第五代下館藩主の娘であり当代下館藩主の妹であった。
(20) 佐々井信太郎編集委員代表『二宮尊徳全集』第九巻　書翰四（昭和五年〈一九三〇〉十月・二宮尊徳偉業宣揚会）一〇四六頁参照、引用。
(21) 前掲注（20）同書六一三頁、六七五頁の安政元年四月十四日（一八五四年五月十日）付衣笠兵太夫筆書簡、同書七九五頁の安政二年十一月十四日（一八五五年十二月二十二日）付二宮弥太郎筆書簡、同書八九一頁の安政三年十月二十四日（一八五六年十一月二十一日）付二宮弥太郎筆書簡などでは勘ケ由表記である。

(22) 橋本博編『大武鑑』巻三（昭和十年〈一九三五〉六月・大洽社）を参照すると、奥山小一兵衛、もしくは奥山小市兵衛という人物は、『大武鑑』宝永二年（一七〇五）版・二三頁、宝永五年（一七〇八）版・二三頁では数野甚五兵衛に続き、宝永七年（一七一〇）版・二四頁にも牧甚五兵衛に続く石川近江守総茂の家臣として掲載されている。数野甚五兵衛は宝永七年（一七一〇）版では牧甚五兵衛となっているが、奥山小一兵衛は奥山金剛の、牧甚五兵衛は家老・牧志摩の先祖であろう。注（7）掲『下館市史』三七二頁によると、石川総茂は「享保十七年（一七三三）三月一日伊勢国の領地を改められ、常陸国真壁郡、河内国石川郡のうちに移封され三千石を加増されて、計二万石をもって下館藩主となった」という。宝永年間の『大武鑑』に見える奥山小一兵衛は、下館藩で家老職を務めた牧家の先祖とともに石川総茂に従い伊勢神戸藩から下館に移り、総茂が初代藩主となった常陸下館藩の要職に就いたと考えられる。しかし、享保十七年（一七三三）に伊勢国からやってきた奥山小一兵衛が、文政十一年（一八二八）生まれと推測される奥山金剛の父親である奥山小一兵衛と同一人物とは到底考えられない。代々の奥山家当主に小一兵衛を名乗る者が複数いたと考えられ、伊勢から下館にやってきた奥山小一兵衛は奥山金剛やその父・奥山小一兵衛の何代か前の先祖であろう。

(23) 山岡鉄舟筆奥山金剛宛書簡に豊彦が手製の包み紙に「山岡鉄舟／宛名奥山は小生母方祖父」という上書きを施したものが遺族宅に保管されている。

(24) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇研究』第十八号（平成七年〈一九九五〉三月・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）一四六頁掲載の三村竹清日記『不秋草堂日暦』に、「朝市ヶ谷谷町に道具やへ行きて兎の手焙をもとむ（中略）去春有田兎毛三氏集古会へ出品されしものと同物也　同氏之祖父駕篭の中へもつものニしたるにて（下略）」とある。兎毛三の実家奥山家の祖父と明記されているわけではなく養家有田家の祖父である可能性も否定はできないが、「駕篭の中へもつもの」とあることから、家老であった奥山小一兵衛が駕篭内で使用していた可能性がある。

(25) 『集古』辛酉第五号（大正十年〈一九二一〉十月・集古会）八丁表の「第一百三十四回集古会記事」を見ると、有田兎毛三は曾祖父にあたる石川総般の手跡である「石川総般草書飲中八僊歌」のほか、「石川主殿頭総安自筆由緒書」など、奥山家主家であ

る下館藩主石川家関連の資料を第百三十四回集古会に出品している。

(26) 小林一茶『おらが春』（嘉永五年〈一八五二〉・信陽弓明庵）所収「脇起誹諧連歌」四丁裏参照、引用。李郷の句の一つ前には常陸の紫山という人物の句、李郷の次には上毛の分尾という人物の句が収められている。

(27) 中学校二年生の夏、明治三十二年（一八九九）七月三十日から同年八月十一日まで香川から広島、岡山を旅した時に記した『四国中国旅行日誌』や、「秋夜故郷を思ふの記」と題した明治三十四年（一九〇一）、中学校四年生時の作文が遺族宅に保管されている。

(28) 表に十折名義の俳句、裏に田村徹の名が記された短冊が豊彦遺族宅にある。邨田聴泉『聴泉古稀集』（昭和十五年〈一九四〇〉九月・村田六太夫刊）一四五頁では、昭和三年（一九二九）五月六日に開催された和歌俳句の雅会参加者の一人として柏崎女学校の田村十折の名が挙がっている。

(29) 前掲注（20）同書二五三頁参照、引用。

(30) 注（19）の通り総承の父親は総般であるから、総承の実子である第八代下館藩主石川総貨は李郷の甥にあたる。

(31) 前掲注（1）同書六二頁より引用。

(32) 前掲注（1）同書七四頁より引用。

(33) 注（32）に同じ。

(34) 橋本博編『大武鑑』巻八（昭和十一年〈一九三六〉六月・大洽社）天保十四年（一八四三）版・十二頁、天保十五年（一八四四）版・八頁参照。

(35) 佐々井信太郎編集委員代表『二宮尊徳全集』第五巻（昭和三年〈一九二八〉八月・二宮尊徳偉業宣揚会）二〇〇頁参照、引用。

(36) 井口丑二、佐々井信太郎編集委員代表『二宮尊徳全集』第三巻（昭和二年〈一九二七〉九月・二宮尊徳偉業宣揚会）五九一頁参照、引用。

(37) 前掲注（36）同書六〇一頁より引用。

(38) 前掲注（36）同書六二二頁より引用。

(39) 前掲注（36）同書巻頭の凡例に、「原文の文字の使用例、極めて自在にして、敬、啓、慶。右衛門、左衛門。造、蔵。治、次。等の混用は普通であつて、弥勒寺を見六寺、谷貝を谷外の類、随所に現はれたが、大なる故障のない限り原文尊重の事とした」とあり、小一兵衛の名の多様な表記もさほど意味がなくなされていると考えられる。

(40) 佐々井信太郎編集委員代表『二宮尊徳全集』第六巻（昭和四年〈一九二九〉五月・二宮尊徳偉業宣揚会）に天保九年（一八三八）分として四一三～四一四頁に収録されている十一月八日（一九三八年十二月二十四日）付奥山小一兵衛筆書簡には、「然ば先日は参上仕候処、種々御教諭被下置、難有奉存候」、「則牧甚五大夫今日参上仕候、何分にも御趣法御世話御引請之儀、偏に御頼申上候」とあり、下館藩の仕法を引き受けた尊徳へ礼を認めている。

(41) 中里介山編著『二宮尊徳言行録』（明治四十年〈一九〇七〉九月・内外出版協会）一〇〇～一〇二頁より引用。

(42) 佐々井信太郎編集委員代表『二宮尊徳全集』第二十五巻・仕法下館領（昭和五年〈一九三〇〉二月・二宮尊徳偉業宣揚会）「解題」二～三頁参照、引用。

(43) 佐々井信太郎編集委員代表『二宮尊徳全集』第二十六巻・仕法下館領二、諸州諸家一（昭和五年〈一九三〇〉二月・二宮尊徳偉業宣揚会）を参照すると、報徳信友講初回積立金名簿である天保十四年（一八四三）報徳信友助成銭日掛名前帳には、奥山小一兵衛の次に「同斧太郎」という人物の名が記され、以降度々積立金出資者や貸附人投票者に名を連ねているが、嘉永元年（一八四八）十二月の「報徳信友助成金取調帳」に登場して以降、嘉永二年（一八四九）十二月の報徳信友助成金取調帳において奥山勘解由の名が奥山小一兵衛の次に記され初登場するのと入れ違いに、奥山斧太郎の名は一切出てこなくなる。嘉永二年（一八四九）、奥山金剛は満二十歳か二十一歳で元服して斧太郎の名を改め、勘解由と名乗るようになったと推測される。

(44) 前掲注（43）同書二〇七頁掲載の弘化元年（一八四五）十二月「報徳信友助成金貸附人撰帳」を参照すると、牧志摩は三番目に多い五人の票を集めて貸附人に選出されている。

(45) 前掲注（43）同書二一四頁参照。

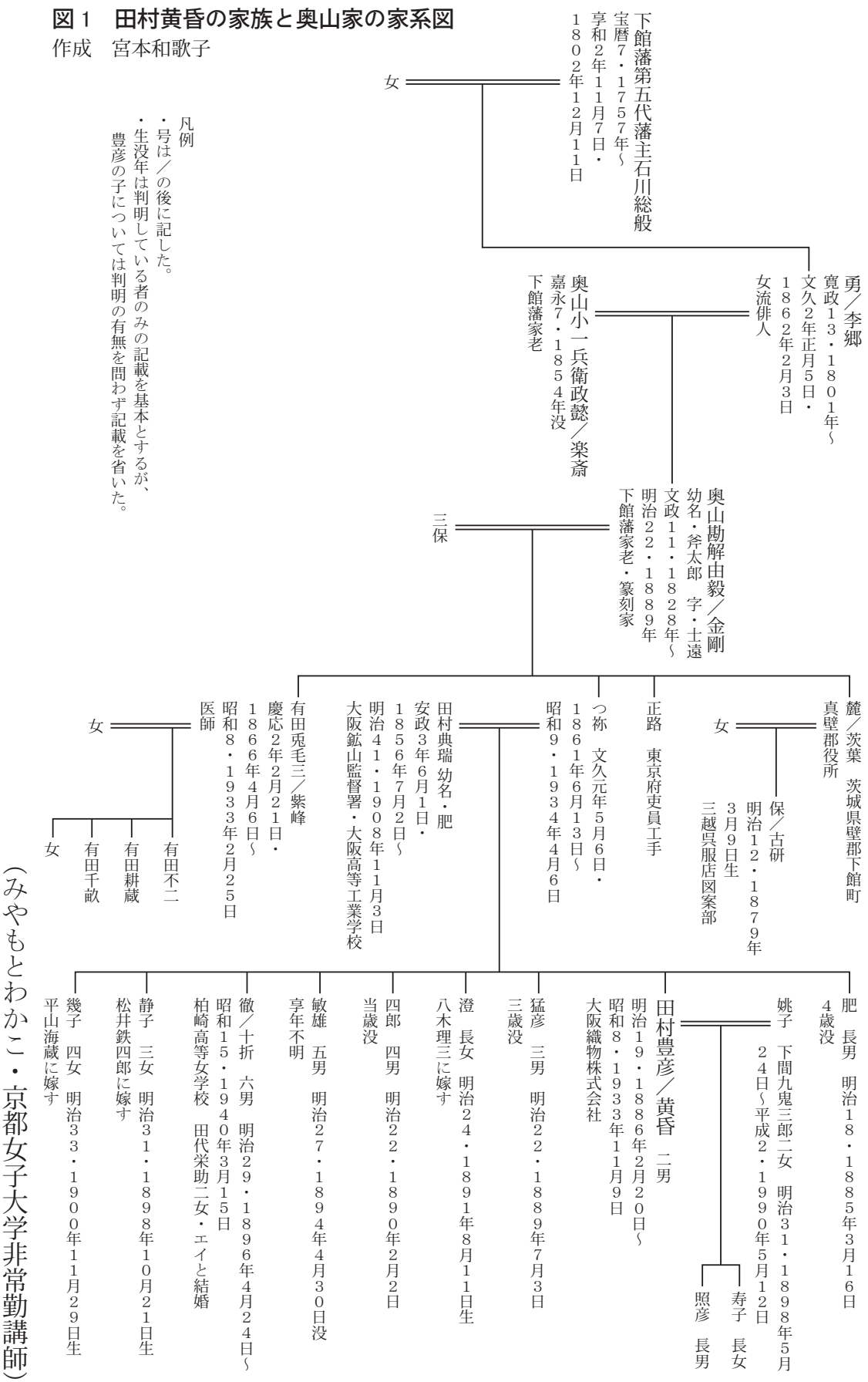
(46) 前掲注（43）同書二五一頁、二七四頁参照。
(47) 前掲注（20）同書二七九頁参照、引用。
(48) 橋本博編『大武鑑』巻九（昭和十一年〈一九三六〉七月・大洽社）嘉永七年（一八五四）版・一六頁参照。
(49) 前掲注（48）同書『大武鑑』巻九、安政六年（一八五九）版・一四頁、橋本博編『大武鑑』巻十一（昭和十一年〈一九三六〉十月・大洽社）慶応三年（一八六七）版・一三頁参照。いずれも勘ケ由表記である。千早赤阪村史編さん委員会編『千早赤阪村誌　資料編』（昭和五十一年〈一九七六〉三月・千早赤阪村役場）三六六頁掲載、安政四年（一八五七）四月「下館江府河内惣御家中席順帳」には家老牧乾以下年寄の三人目に奥山勘解由の名があり石高は牧乾の高五百石に次ぐ高二百三十石と記され、下館藩家臣団第二位の俸禄であった。
(50) 前掲注（49）同書『大武鑑』巻十一、明治元年（一八六八）版・一四頁参照。勘ケ由表記である。
(51) 内容の参照や引用は、所蔵している遺族の承諾が得られていないため行っていない。
(52) 令和五年（二〇二三）九月京都女子大学国文学会『女子大国文』第百七十三号・一二四～一四九頁掲載の拙稿「与謝野門下新詩社歌人・田村黄昏について　―略年譜の作成、田村黄昏ならびに与謝野寛未発表歌の紹介―」、令和五年（二〇二三）九月京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学国文学論叢』第四十九号・七三頁～八五頁掲載の拙稿「与謝野門下新詩社男性歌人による愛児の歌　―田村黄昏、万造寺斉の歌集から―」で詳述している。

〔付記〕

引用文は現行の字体を用い、斜線で改行を表し、適宜ルビを省き明らかな誤りは改めた。豊彦の遺品や短冊、戸籍謄本を提供し協力してくださった豊彦の遺族にはこの場を借りて改めて深く感謝申し上げる。

図１　田村黄昏の家族と奥山家の家系図

作成　宮本和歌子



凡例
・号は／の後に記した。
・生没年は判明している者のみの記載を基本とするが、
　豊彦の子については判明の有無を問わず記載を省いた。

（みやもとわかこ・京都女子大学非常勤講師）